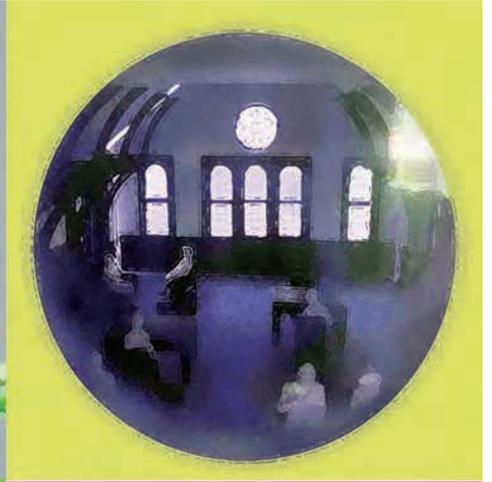


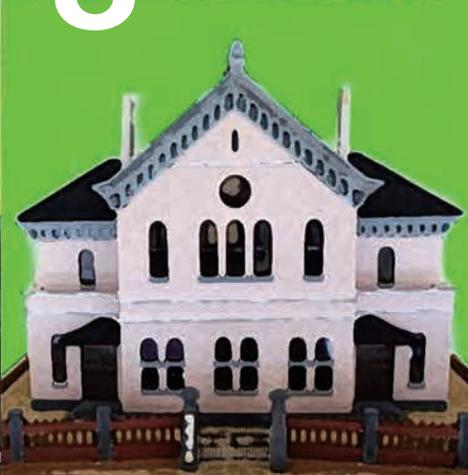
SNE-T

筑波大学附属学校教育局 特別支援教育連携推進グループ

No 14
2022.07



3 4 5 6 7 8



巻頭インタビュー：梶山正明先生（筑波大学附属学校教育局教育長補佐）

知的好奇心

今号では、附属学校教育局教育長補佐の梶山正明先生にお話を伺います。

梶山先生のご経歴からお聞かせください。

東京学芸大学で理科教育を学びました。卒業後、都立高校に10年間在職し、1993年に附属駒場中・高等学校の教員になりました。駒場には28年間勤務し、最後の4年間副校長を務めました。駒場では最初の3年間担任をした後、文科省の内地留学の制度を利用して、東京学芸大学大学院理科教育研究科で学び教育学修士をとりました。研究したのは有機光化学です。2021年4月からは教育局で仕事をしています。

教育現場で大切にされてきたことについてお聞かせください。

私の2回目の担任が終わったころ、学校がSSH（スーパーサイエンスハイスクール）という研究開発学校に応募して、2002年から研究開発をはじめました。4期連続で取組み、昨年度20年目を終えたところです。おかげ様で設備も充実し、高価で新しい機器を使って実験することができました。

一方、優秀な生徒が多い駒場だからといって、大学のような授業をそのまま行うというのでは意味がありません。理解とは、世の中で起きていることが、なぜそうなっているのか、その理由を知り納得した上で受け止めることができるようになることです。自分が過去に得た知識と結び付け、それがどのような仕組みになっているのかが理解できれば、次に何か問題が起きたときにも対策の取り方が分かるようになります。基本的に、起きている現象、自然現象を理解することができるような力を身につけるのが理科教育の役割だと考えています。

それから、理解するということは、自分の頭で考

えたことを出力できるようになることだとも考えています。その意味でノートのまとめ方については厳しく指導してきました。プリントも活用しましたが、単に穴埋めをするだけでなく、最後は自分の言葉で書き進められるようになることを常に意識して授業を進めてきました。

生徒の成長をどのような目で見つめてこられたのでしょうか。

ここでは部活動についてお話ししたいと思いません。私は科学部の顧問をしていました。科学部は生きづらさを感じている生徒の居場所にもなっていたように思います。もともと駒場中に科学部はありませんでしたが、ある生徒が「科学と共に生きる会」という同好会をつくって1人で活動を始めました。他の生徒とうまくなじめない子でしたが、高校を卒業するころには人間的にも立派に成長することができました。理由はいろいろ考えられるのですが、その生徒が高校生になったときに中学1年生がたくさん入部してきました。何も知らない中1たちはその生徒をいじるのですが、それがまんざらでもない様子で徐々にいい関係ができていきました。意外な展開で不思議に思いましたが、その生徒にとっては気が許せる下級生とのほうが人間関係を築きやすかったのかもしれない。部活動には人間を育てるうえでの様々な効用や意義があることに気付かされました。彼は、大学卒業後アメリカに渡り、今は中国で生命科学の研究をしています。10年くらい前に科学部OB会が作られましたが、研究者になっている生徒が結構いるので、OBによる部内講演会を毎年1回開催しています。講演は20分程度に設定するのですが、その後の質疑応答は盛り上がり、その何倍もの時間に及びます。

それから、10年くらい前から、科学部は太子町の小学校で実験教室をしています。太子町は茨城県の県北にあり、筑波大学と連携して教育を進めています。SSHのある時のテーマは「教えあい学びあい」でした。人に教えることで学ぼうということです。高校生が小学生4,5,6年生に理科の授業をします。ある時の科学部の部長は少し変わった生徒で、しばしば自己中心的な行動をしていました。ところが太子町に行ったら小学生たちの間で人気者になり、ちょっと風変わりな彼を取り囲んで離さないのです。本人もすごくびっくりしてしま

～「知りたい」と思う気持ちが未来を創る～

た。それを境にしてその生徒の行動が変わりました。科学部の雰囲気も良くなって、こんなに変わるものなのかと思いました。部長としての仕事もするし、後輩の面倒も良く見るし。人の役に立つことを実感したのだと思います。こうした出前授業ではよくお礼の手紙をもらうことがあるのですが、逆に「ありがとうございました」と言いたいくらいでした。高校生にとって年下の生徒に教えることはプラスに作用することがわかりました。それから地域や環境の違い、文化の違いというものに触れ合う機会がとても大切だと思いました。

特別支援教育との関わりなどがありましたら教えてください。

関わり自体はそれほど多くありません。ただ、駒場の生徒でも大なり小なり特徴的な発達をしている生徒がいます。ある部分は得意だがコミュニケーションが下手とか、片付けができないとか。しかし、そのことで周囲から足を引っ張られるということはありません。例えば数学だけすごくできるとすると、他は至らない部分があっても最終的には尊敬される。はじめのうちは揶揄されるとか、そういうことはもちろんあるのですが、生徒自身に対人関係やコミュニケーションの問題があったとしても、最後はそこそこに改善して生活できるぐらいになります。もちろん、担任のコントロールもありますし、いろいろな行事の中で鍛えられるということもありますが、そもそも互いの良さを認め合う校風があり、私自身もそのことを誇りに感じてきました。

ところで、先ほどノートの取り方についてお話ししましたが、付け加えておきたいエピソードがあります。実はこのノートをまとめるという作業に難しさを感じている生徒もいました。理科の授業では実験・まとめ・実験・まとめを繰り返します。ノートを見開きで使って実験ノートを作っていきます。ある時、クラスの中にちょっと手応えが悪い生徒がいることに気が付きました。ノートの提出ができないのです。はじめはとにかく頑張れみたいな感じで生徒に接していましたが、改善されなかったのでスクールカウンセラーに相談したところ、世の中には字を書くことに困難を感じる生徒もいて、無理やり書かせても負担になるので、もう少し段階をつけてあげてはどうかというアドバイスを受けました。そこで考えたのが板書と同じプリントを作ることでした。そして、そのプリントはノートに貼って



もいいことにしました。ただし結果については自分で見たことを書きなさいと。その方法にしたところ、だいぶノートが書けるようになって提出率も上がりました。もちろんこの方法では、ノートが書けていた生徒が易きに流れて書かなくなってしまうこともあり、その加減が難しいのですが、私にとって貴重な経験になりました。

特別支援教育に携わる教員に期待することについてお願いします。

特別支援学校と通常学校には、もちろん指導の違いはあります。また、おそらく特別支援学校のほうが特性の差も大きいと思います。ただ、本質はあまり変わりはないんじゃないかという思いもあります。多分教育のねらいは同じではないでしょうか。何か現象を見たときに、これは何だと疑問をもち、考えるということ、そういう姿勢や態度を身に付けてほしいと思っています。特別支援学校の子供たちには確かにできることに制限があるかもしれませんが、そうした中でも、良いところやできるところの力を伸ばす方向に特別支援学校の先生方も子供たちを引っ張っていただけないでしょうか。支援するのはもちろんですが、子供たちの知的好奇心に着目して、子供たち自身が考えられるような、またそうなるといった材料が与えられる指導を心がけていくと良いと思います。

* * * * *

このインタビューは2022年6月2日に附属学校教育局梶山研究室で行われました。

（聞き手：高尾政代 / 橋本時浩）



附属学校実践紹介

附属学校の日常的な実践の中には、素晴らしい取り組みがたくさんあります。

ことばの力と自分から考えて積極的に行動する力を育みたい

～附属聴覚特別支援学校 幼稚部の先生に普通の授業で大切にしていることをお聞きしました～

幼稚部ではどんなことを大切に考えて授業をしているのでしょうか

小柳

子供たちの人間関係です。友達に自分が思っていることや考えていることを話したいという気持ちを育てていくところから始めます。友達の話を聞きたいとか、分りたいとか、そういう気持ちを育てることが人間関係を築くことに繋がると思います。

澤田

自分のことが大好きで、自分の周りに居る人のことも大好きという気持ち。自分を大切にできる心、伝えたいと思う気持ちを育てることを根幹として幼児期の指導を考えています。

入学時の子供たちの様子を教えてください

小柳

集団に慣れていないし、お母さんたちも子供たちに対してどう関わっていけば良いかわからない中で、どうやってその関係を築いていこうかと、4月はいつも手探りの状態で始まります。

澤田

音声言語としてもこれからで、何かを伝えるときでも、指差しだったり、ものを持ってきたり、腕を引っ張って連れて行こうとしたり、そういう感じです。

子供たちの言葉はどのようにして育っていくのでしょうか

澤田

3歳児段階はまだ大人が考えているような言葉ではないのですが、仲良くなると何かを伝えようとしてきてくれます。最初のうちは全部



小柳達朗先生

澤田真喜子先生

受け入れるようにします。そうすると、表情や言葉にならない言葉であっても先生は分かってくれる、と思ってくれるようになります。そしてこちらの言葉をきちんと聞いてくれるようになります。入学してくる段階で、お母さんと一緒に何かを見て思いを共有できるとか、そういう向き合える親子関係ができていると良いと思います。

小柳

4歳児段階は、分かってほしいことや言いたいことがあるのですが、うまく教師に伝えられずにじれる姿が見られる時期でもあります。そのため、教師は、子供たち一人一人の気持ちに合った言葉を聞かせたり、口声模倣を誘ったりするなど、日本語の基礎を作っていくようにします。口声模倣を誘うにあたっては、子供たちの言葉の力に合わせて適切な言葉を聞かせます。また、基本的には、言い切った満足感や充実感が味わえるように、最後まで言えて終わりにすることとしています。それから、話し合いの中で口声模倣を誘っている時は、友達が頑張っている様子を見せたり、一緒に練習したりするよう促すこともしています。そして、最後まで言えた時には、全

員で喜び合ったり褒め合ったりします。

5歳児段階では、子供たち同士の話し合いも増えて、さらに人間関係が良くなっていきます。実際にその場に行ったり、実物や写真、絵日記を見せたり、実際にやってみせたり、音韻サインをつけたりするなど、どのようにしたら伝わるかいろいろな方法を考えています。どの年齢の段階においても、人間関係が基になっていると感じています。

普段から心がけていることは何でしょうか

小柳

子供たちの興味や関心を探ることに努めています。そして、それが分かったら、次は生活経験を知ることです。どんなことを経験しているかを把握することが大切になります。それが分かってくると、この話をしたら、こういう話をしてくれるかもしれないとか、予想を立てやすくなります。

言葉の力を育てるための具体的な指導にはどのようなものがあるのでしょうか

澤田

発音指導です。発音明瞭度も求めていきますが、一番大切なことは音韻意識を育てることだと理解しています。例えば「おはな」を「おたな」と書く子供がいますが、「おは」と筋感覚で音韻意識が育っていれば「おはな」と「おたな」が自分の中で区別できるようになります。それから普通の授業では口声模倣もよく行います。ただ、それをうまく行うには「この先生は自分のことを分かってくれている」という100%の信頼感が必要です。それがないと模倣してくれません。また、模倣をしたとしても形骸的なものにしかありません。

教師をしていて良かったと思うことをお話しください

小柳

子供たちの喜怒哀楽を間近で感じながら、お母さん方と子供たちの成長と一緒に喜びあえることです。躓きもありますがそれも含めて良い方向に向くように取り組んでいます。それがやりがいです。

澤田

大人になると感じる心が麗しさを失い、「これはこういうものだろう」と決めつけて、どんどん感じる心が鈍くなっていくように思います。大人が気付けなくなっていることを子供たちに教えてもらっています。世界の面白さに気付かせてもらえる新鮮な驚きは私にとってのエネルギーになります。

今後の目標をお話しください

小柳

専門性の継承と時代の流れに合った支援と指導ということを考えていきたいです。先輩が残してくれた記録や文献を参考にして、今度はそれを後輩の教師にも伝える立場になってきているのかなと考えているところです。

澤田

育てられ育っていくという関係の中で、子供たちがどんなふう成長して行くのか、また大人との関係を作る中で、その関係性がどう変容していくのか、そういう視点でお母さん方と一緒に考え、悩み、支え合いながら楽しく子供たちを育てていきたいと思っています。

* * * * *

(聞き手：連携推進グループ 橋本浩志)



令和4年度 現職教員研修について

特別支援教育における専門的知識と実践力に優れた教員の養成を目的として、当グループ、附属特別支援学校5校、筑波大学人間系が協働しながら現職教員研修を実施しています。

専門性向上研修（1年間または6か月）と、指導力向上研修（3か月または1か月）の2つのコースがありますが、どちらも附属特別支援学校5校での実践実習を中心に進めています。

さて、現在2人の先生が研修を行っています。北海道旭川高等支援学校 中島恵先生（1年間）と、埼玉県立日高特別支援学校 新井幸子先生（6か月）です。中島先生は、前期に附属大塚特別支援学校、後期に附属視覚特別支援学校で実践実習を行い、「生徒が安心して学べる環境づくり」というテーマで研究を進めていかれています。新井先生は、2か月間、附属桐が丘特別支援学校で、約1か月間を附属視覚特別支援学校で実践実習を行います。研究テーマは、「自立活動を主とした教育課程における教科指導の実践」です。

また、11月からの1か月間、12月からの3か月間の指導力向上研修の先生をお二人お迎えする予定です。

令和5年度の現職教員研修については、9月初旬ごろまでに各都道府県等の教育委員会や特別支援学校に要項等を送付いたします。また、研修のオンラインガイダンスも予定しております。併せて、同時期に当グループのホームページにてご案内します。



* * * * *

令和4年度からは1か月・3か月の指導力向上研修について、年度内での随時募集も開始しております。ご関心のある先生は、当グループまでご連絡ください。

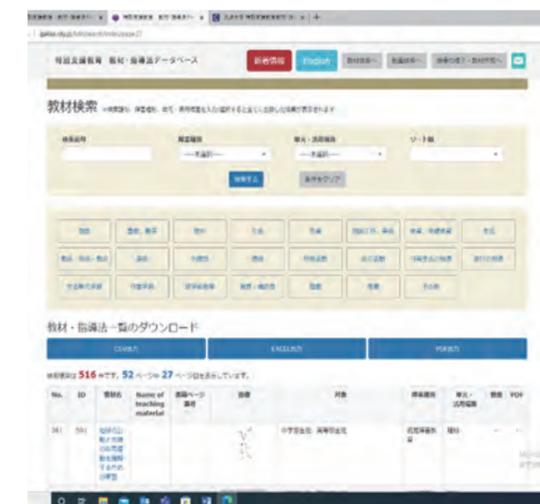
教材・指導法データベースのご紹介

特別支援教育連携推進グループでは、特別支援教育研究センターからの取組を引き継ぎ、平成24年度より特別支援教育において活用できる教材と指導法をデータベースにて公開してきました。掲載されている教材・指導法は、いずれも筑波大学附属特別支援学校5校で実際に使用されてきたものです。2022年7月現在、516件の教材と指導法を掲載し、うち230件を英訳しています。昨年度より、翻訳者に、英語が母国語でない国の方々にも分かりやすい英語に訳していただいています。

検索は、語句、障害種別、単元・活動場面で行うことができます。ぜひ、ご利用ください。また、ページをスクロールし、下の方にある「感想は、こちらから」をクリックしていただき、御意見や御感想を送信していただけると幸いです。皆様の御要望等も反映させ、更に活用していただけるように改善していきたいと思っております。これからも、教材の写真や動画なども可能な限り掲載し分かりやすくお伝えできるように努めてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

データベースの URL はこちら

<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/kdb/index.html>



1 「ご利用にあたって」をお読みの上「上記に同意して利用する」をクリック

2 教材検索のページが表示されます



筑波大学附属視覚特別支援学校
中村里津子



筑波大学附属聴覚特別支援学校
橋本時浩



筑波大学附属大塚特別支援学校
根岸由香



筑波大学附属桐が丘特別支援学校
向山勝郎



筑波大学附属久里浜特別支援学校
高尾政代

今月の巻頭インタビューは附属学校教育局教育長補佐の梶山先生にご登場いただきました。附属駒場で教鞭をとられた先生ですから内容は、ハイレベルな授業や研究にかかわるものになると思いますが、多感な時期の生徒たちと正面から向かい合い、その成長を寄り添いながらゆっくり見守るという人間味溢れるお話になりました。また、生徒との関わり方は意外にも特別支援教育に通じるものがあり興味深く思いました。学校種は違えども教育の根本は変わらないことを改めて教えていただきました。

さて、今回も多くの方々のご協力をいただきながら「SNE-T」(14号)が完成いたしました。記事集めに奔走し始めたころは陽気も穏やかで目に映る緑も優しい輝きを見せていましたが、気がつけば猛暑の最中。茗荷谷の蝉は一段と甲高い声で鳴いています。このところ毎年のこととは言え、暑さが厳しい夏になっています。みなさまご自愛専一にてお過ごしください。今年度も、引き続き特別支援教育連携推進グループをどうぞよろしくお願いいたします。

(橋本時浩)

梶山先生から、これまで出会った生徒たちとのエピソードを聞かせていただきました。特別支援教育の専門性とは何か、期待されていることは何か、それを実現するために、具体的に何をすればよいのか明確にすることが私たちの役割であると思えました。改めて身が引き締まりました。

(高尾政代)

表紙：オマージュ・筑波大学附属聴覚特別支援学校

SNE-T

Group for the Special Needs Education, University of Tsukuba